

GF

ジェンダーフォーラム
通信

GENDER FORUM PRESS

和光大学 ジェンダーフォーラム 〒195-8585 東京都町田市金井ヶ丘5丁目1番1号 和光大学ジェンダーフリースペース(G112) TEL 044-989-7777 内線4112 gen-free@wako.ac.jp

GF EVENT

自主企画「映画『カランコエの花』上映会&ワークショップ」を実施して

2024年9月19日(木)、本学で開催された上記のイベントでは、授業時間をお借りした「社会教育論」の受講者と、事前にGoogleフォームで募った希望者・教職員含め、計22名の方が参加してくれました。講演は社会教育実習の一環として私が企画・提案し、実習先である相模原市立男女共同参画社会推進センター(ソレイユさがみ)が主催、ジェンダーフォーラムが共催の「出前講座」という形で実現したものです。

講演会では、中川駿監督の映画「カランコエの花」を上映後、2015年に一橋大学で起きたアウトティング事件を紹介しました。「カランコエの花」とは、ある高校のクラスで「LGBTについて」という授業が行われたことをきっかけに、生徒に渦巻く疑念や葛藤を描いた作品になっています。国内の映画祭で数々の賞を受賞しており、教育機関向けのDVD貸出も行っていたのでセレクトしました。また、一橋大学の事件を引き合いに出すことで、「アウトティング」の暴力性や、世間に根強く残る差別・偏見についても考えてもらいました。

映画は2016年のものだったため、視聴した学生の中には「少し前の価値観だ」と感じた人も多かったようです。上演後、作品や事件について感じたことを共有する時間を設けたところ、「知らなかった」「考えるいいきっかけになった」「登場人物の気持ちが痛いほどわかって胸が苦しくなった」など良い反応を多く頂けました。また、小松賢亮先生の共通教養、「セクシュアル・マイノリティのこころと支え」でも紹介していたらしく、先生の授業と、当事者である私の説明とで、ちがいを感じた人もいたようでした。

LGBTQという言葉が社会に浸透してしばらく経ちますが、まだまだ間違った知識や偏見を抱いている人も多いの

が現状です。マジョリティの人たちが自分の持っている優位性(心と体の性が一致しており、異性を好きになること)に気づかず、彼らを「異質なもの」として攻撃する浅はかさが(あるいは無知ゆえの悪意ない一言が)、彼らを苦しめ、時に命さえも奪ってしまう場合もあるのです。

「彼らの全てを理解しろ」「受け入れろ」とまでは言いません。彼らは自分たちのマイノリティ性を十分に理解しています。だからこそ、今一度自分の立場を俯瞰して、「自分の発言・行動が誰かの気持ちを踏みにじっていないか?」ということは考えてみてほしいです。セクシュアルマイノリティに限らず、この世界には様々な価値観を持った人々が共存しています。みんながみんな他者の気持ちを少しだけ思いやれるような、優しい社会の実現が目指されることを願ってやみません。

この度は貴重な機会をいただきまして、本当にありがとうございました。私の行った講演会が、少しでもセクシュアルマイノリティやアウトティングについて考えるきっかけになったのなら幸いです。

(学生 リョク・心理教育学科)



▲ワークショップの様子

共通教養科目「法と人権」授業内
2024年度デートDV防止啓発講座
講師・西山さつきさん（NPO法人レジリエンス）

<2024 年 11 月 21 日（木）開催>

DV とはドメスティック・バイオレンス（親密な関係での暴力）の略称です。中でも結婚していない恋人間でおきる DV のことをデート DV といいます。デート DV は、異性カップルでも、同性カップルでも、男性から女性でも、女性から男性でも起きます。しかし危険性が高いとされるのは男性から女性に対する暴力だと言われています。また、交際中でなくても、性的同意のない身体的接触などもデート DV の相談に行っているとい私は思います。

レジリエンスという言葉があります。これは私たちの中にある、自分自身が持つ力です。私たちは本来、レジリエンスを持っています。しかし、何らかの被害者という属性は、「傷ついた人、弱っている人」という側面にフォーカスしてしまい、レジリエンスが見えにくくなります。被害者という属性のみが目立ち、自分自身の力（レジリエンス）を感じにくいのです。そのため、NPO 法人レジリエンスでは、被害者という呼び方を避け、自ら輝ける力を持っている人、という意味で、☆さん（ほしさん）と呼ぶそうです。

☆さんは DV に遭っているという事実を認めるのに力があるため、否認・矮小化などの反応を示すことが多いそうです。否認は「私の場合は DV ではない」と思う、矮小化は「これくらいたいしたことはない」と思うことです。矮小化の一例として笑いながら被害に遭ったことについて話すということがあります。これは笑いながらでないと深刻すぎて話せないからです。

DV の相談相手として一番は友人が考えられます。もしあなたが、☆さんに相談を受けたらどうしたらいいのでしょうか。相手の話に耳を傾け「あなたは悪くない」と繰り返し伝える、寄り添うことが必要とされる、ということが、西山先生のお話では強調されていました。これにはかなりの忍耐と粘り強さが必要とされ、負担に感じることもあるとい私は思いました。西山先生は、自分たちだけで問題を解決しようとするのは危険であり、友人と一緒に信頼できる大人に相談するなり、「専門の支援につなげること」の大切さをおっしゃっていました。私は現

実的にはそこが一番難しいのではないかと思います。否認・矮小化などの反応を示す☆さんは、第三者の大人に相談することや、専門の支援に行くことをおおげさに感じて消極的になりがちなのではないのでしょうか。支援につながることで DV 被害者という事実を認め、向き合わなければならない過程はとてもしんどいと思います。支援機関に行きたくないという人もいるでしょう。そこをどうしていけばいいのか、支援する側の友人のケアなどが課題としてあると思いました。

暴力や差別、格差・貧困にまつわるいろいろな問題に対応した相談機関の充実をはかることも課題です。何故なら、デート DV は暴力に起因する様々な問題の中の一部だからです。貧困・虐待など家族の問題、いじめ・体罰など教育現場の問題、パワハラ・カスハラ・過重労働など労働にまつわる問題など、正直、どこから手を付けていいのか途方に暮れてしまいます。それでも、投げ出さないで一つ一つ地道に根気強く取り組んでいきましょう。一人にできることは限られていますが、この問題から目をそらさず根気強くできることをすることです。もしも、あなたの大切な人が苦しんでいたら。☆さんだったら。あなたはその人の傍にそっと居るだけでも十分寄り添えています。社会全体に対して、暴力や差別を容認しない、人権を尊重する雰囲気醸成していくことも大切です。その点で、デート DV 防止啓発講座を毎年コツコツと継続していくこの取り組みは大切だと改めて感じました。

（西川春菜・ジェンダーフォーラムスタッフ）



▲西山さんの講演の様子

<受講した学生のコメントを紹介します>

私はこれまで DV と聞くと、主に身体的な暴力を想像していた。そのため、「尊重のない会話」として示された精神的な DV の例が特に印象に残った。身体的な暴力は「絶対にやってはいけないこと」として自分の中に強く根付いているため、それを行わない自信はある。しかし、相手との会話において自分の意見を優先し、相手の気持ちを無視したり、一方的に話してしまったりする可能性は否定できない。また、意図せずに使った言葉が相手にとって傷つく内容となり、精神的な DV とみなされることもあると気づかされた。

このことから、自分も加害者や被害者になり得るということを理解し、日常的に言葉遣いや態度に注意を払う必要があると感じた。さらに、スライドにあった「ありがとう」「ごめんなさい」「助けてください」という 3 つの言葉の大切さも印象に残った。「ありがとう」は感謝できることに焦点を当てることで、自分や相手の気持ちを明るくする力を持つ。「ごめんなさい」は間違いを認めて正す大切さを示し、関係を修復するきっかけとなる。そして、「助けてください」は困ったときに助けを求める勇気の重要性を教えてくれる。これらの言葉を普段から意識し、相手を思いやる姿勢を忘れないようにしたい。この学びを通じて、自分のコミュニケーションを見直し、互いに尊重し合える健全な関係を築いていきたいと強く思った。

（学生・心理教育学科）

講師の先生が「DV は夫婦間だけでなくその子供にも大きな影響を与える」ということをおっしゃっていましたが、本当にその通りだと思いました。かくいう私の両親は、父親の DV が原因で離婚しています。もう 10 年以上も前のことなので、私自身幼かったこともあり、その記憶はほとんどなく、父と母が言い争っていた原因については今更聞こうとも思わないため、DV の発端や経緯は分かりません。しかし、いつも二人が言い争いになると最終的には父が激高し、近くにある茶碗やリモコンを叩きつけるといった光景は何度も目にしました。その度に私と姉だけが別の部屋に移り、その場が終わるまで耐え凌ぐというのを繰り返していました。幸い、父もあくまで争っているのは妻だ

けであるという正常な認識はあったため、自分の子供に暴力を振るおうとは思わなかったのか、私たち姉弟はこれといった身体的危害は受けませんでした。それでも大の大人が感情的になる様子は小学生だった私には衝撃的で、精神的なダメージは少なからず受けています。講義の中の DV に関する問診で「〇〇の前で電話したくないと感じる。」という問いがありましたが、私の母もまさに、誰かに電話で相談する際は必ず父がいない時間を狙っていました。被害者が最も相談する相手は友人だとおっしゃっていましたが、このような経験をしてきたものとして、もし友人に被害の相談を受けた際は適切な対処を心掛けたいと感じました。

（学生・心理教育学科）

特に印象に残ったのは、暴力が「力の差」から生じること、そして暴力を受けた側が「無力感」に陥り、心身に深い傷を負っていく過程です。DV は身体的な暴力だけでなく、経済的暴力や精神的暴力、さらには性暴力にも及ぶという点が強調されており、私たちが日常的に見落としがちな暴力の形態に対する理解が深まりました。暴力を受けた人が暴力を振るう相手に対して依存的になる心理状態が説明され、心の傷が簡単には癒えないことが示されました。この心理的なトラウマは、暴力から逃れた後も長く影響を与え続け、被害者が次第に暴力の状況に順応していくことがあるという点は非常に衝撃的でした。また、DV は加害者と被害者の関係だけでなく、社会的な認識にも深く関わっているという点が挙げられます。例えば、「恋人同士だからセックスは当たり前だ」という考え方が性暴力に繋がる可能性があり、明確な同意がないセックスが行われることがどれだけ危険かについて再認識しました。DV は、単に暴力的な行為にとどまらず、精神的、社会的にも大きな影響を及ぼす問題です。

（学生・経済学科）

「セクシュアリティ・ジェンダー・テキスト」授業内作家・評論家 川本直さん講演 松浦理英子『ナチュラル・ウーマン』をクィアに読む



▲講演中の川本さん

『ジュリアンバトラーの真実の生涯』（河出書房新社）を書かれた川本直先生による『ナチュラル・ウーマン』のクィア・リーディング講演会（2024年11月29日（金）開催）は、作家という視点からの話が非常に刺激的で勉強になるところが大であった。

今回のクィア・リーディングは二部制で、第一部は宮崎ゼミ生が川本先生に質問して先生がそれに応える形で行われ、第二部ではG棟のジェンダーフリースペースにて座談会の形で一般の学生も交えた形で行われた。

講演会とはいえ、主に学生が事前に読んでいた『ナチュラル・ウーマン』について表現や展開の疑問や作者の意図するところの考察などを川本先生にぶつけ、川本先生の考えを聞かせていただく、という形で進化した。普段大学で行われている授業とは違い、川本先生は現役の作家であるからして、当然出版業界内の事情に詳しい。我々は読者としての視点から作品を見ることしかできないのに対し、川本先生の視点は、先生が親交のある作者の視点を含んだものになる。こうした視点の違いからくる意見の相違は非常におもしろいと感じた。

具体的な例を二つ紹介する。一つは小説の『ナチュラル・ウーマン』において女性二人が蛸を食べるシーンがある。事前に行われたゼミにおいて、蛸とはグニャグニャした怪物的な肉感からして、絡み合う二人の肉体のメタファーであると考え、このシーンをセックスの隠喩として捉えた。しかし川本先生はこれを作者である松浦

理英子先生が読者をからかってわざと蛸を使ったんでしょと言った。江戸時代の春画にも女性に大蛸が絡むエロチックな場面を描いたものがよくあるから、そこを敢えて狙ったのでしょうか、という話であった。

「蛸」がセックスのメタファーという文学表現を知っている読者からすれば、このシーンは二人の女性が身体を重ねたシーンであると考ええる。しかし川本先生はこの物語はそういう話ではなく、また作者の松浦先生の人柄や作品性から考えると、そうした読みは敢えて読者のミスリードを誘った作者の揶揄であろうという話であった。こうした考え方は机上の書物を読むところからは生まれない考えである。作品から作者の意図を読むのではなく、作者から作品の表現を捉えることは、やはり作家である川本先生にしかできないことである。

もう一つは映画版の『ナチュラル・ウーマン』において不可思議な動きをする登場人物がいた。登場の仕方もさることながら、カットが切り替わるたびに不自然な場所に移動するのだ。これを事前のゼミではこの登場人物は実在せず、主人公にだけ見える天使のような存在なのではと考察した。しかし川本先生は制作者の意図による演出ではなく映画を撮る際にできるつじつま合わせの結果だという。なんでも映画を一本撮るといのは十分な時間の中で行われるものではなく、過密スケジュールで制作され、さらに登場する役者も主要な人物ではない場合飛び入りで参加する場合も多いらしく、このシーンはそうした行き当たりばったりをなんとか編集でうまくように構成したシーンではないかという話であった。川本先生はこの映画版『ナチュラル・ウーマン』を撮った監督に対する造詣も深く、映画版と小説で物語の構成が大きくことなる要因についても事細かく解説してくださった。



▲ジェンダーフリースペースでの講演・座談会の様子

このように川本先生による作品の解説は、映画や小説などの作品を見ているだけではわからないような、まさに作家としてリアルな現場を知る立場から言えるようなものばかりであった。

また今回は『ナチュラル・ウーマン』という一つの小説をクィア・リーディングする授業であったが、話題はこれに留まらず現在の文壇にて起きている事件などについても言及されていた。特に授業があった前日に詩人の谷川俊太郎さんが亡くなられたこともあって、それについて川本先生に質問した学生がいたのだが、このことについて川本先生はいたく感激されて色々な話をしてくださった。

今回扱った『ナチュラル・ウーマン』は日本のレズビアン文学の金字塔として評価されている作品である。この分野に興味のある学生はぜひ一度読んでみることをおすすめする。川本先生もこの作品を自身の恋愛のモデルにしたというほど物語は洗練されていて、1987 年に出版されているにも関わらず扱うテーマは現代にも通ずるほど新しい。また川本先生によるこの界限における作家・評論家・出版社の裏話もここでしか聞けないようなものばかりで終始話題が尽きることなく終わった。

（宮崎ゼミ学生・総合文化学科）

BOOK REVIEW

やまじえびね 著

『女の子がいる場所は』KADOKAWA、2022年



本書は、サウジアラビア、モロッコ、インド、日本、アフガニスタンの文化的・宗教的背景が違う五つの国で暮らす 10 歳の女の子たちが主人公だ。舞台となる五つの国はいずれも、2023 年のジェンダー・ギャップ指数が、146か国中 125 位以下であり、ジェンダー平等の達成率が低いと評価されている。五つの国の五人の少女の視点から彼女たちのありふれた日常が淡々と描かれる。生きて

いくための結婚について、教育の機会の損失が原因で安全や人生の喜びが脅かされる、貧しさゆえ保護者に逆らって生きていけない、勉強よりおしゃれを大事にした方が幸せになれるのか、武装勢力により様々な権利を奪われる中での希望とは…。「女の子だから」と理由付けされた様々な差別や困難が彼女たちに立ちはだかる。日常の中に確かにある差別や理不尽さを、等身大で誠実に、丁寧に描く。優しい絵柄は、かすかな希望と、「負けるもんか」という勇気の灯を与えてくれる。非常に過酷な現実を描いているのだが、不思議と読後感はほんの少しだけ爽やかで、ひと呼吸ぶんだけ、僅かに風通しが良くなったような気持ちにさせてくれる。

（西川春菜・ジェンダーフォーラムスタッフ）

GF EVENT

2024年度GF卒論・卒制発表会

今年度の卒業論文・卒業制作発表会は、2025 年1月15 日（水）、ジェンダーフリースペースを会場として、昨年度と同じく、対面とオンラインのハイブリッド形式で開催されました。発表者・タイトル等は以下のとおりです。

鵜飼さん（総合文化学科）卒業論文「キャンプの楽しみ～男のアウトドアから拓がる女子ソロキャンへの道のり～」（主査：長尾洋子先生）、坂本さん（総合文化学科）卒業論文「変化するコンセプトカフェのかたち」（主査：長尾洋子先生）、鈴木さん（総合文化学科）卒業論文「青年期女子による写真加工の動機と受容—プリクラ利用者に注目して—」（主査：長尾洋子先生）、鳴嶋さん（心理教育学科）卒業論文「虐待防止策としての『物語の共有』—社会教育にできること—」（主査：稲葉浩一先生・副査：打越正行先生）、志田さん（総合文化学科）卒業制作（小説）「異星人レオ」（主査：西田桐子先生・副査：稲葉有祐先生）、奥村さん（総合文化学科）卒業制作（映像）「一歩」（主査：飯田基晴先生）。

鵜飼さんの論文は、アウトドア雑誌『BE-PAL』の全既刊号を総覧し、表紙や記事の変遷を追跡する無疆とも思える作業を基業としたものです。分析の結果、創刊時に若い男性を設定していた読者像が女性を含むものへと拡張されていたこと、また、後には、『falo』など、女性向けのアウトドア雑誌が発刊されたことが明らかにされています。そして、この変化の要因として、キャンプ場の施設改善、キャンプ人口の増加、おしゃれなキャンプ用



▲発表会の様子

品の登場、アウトドア女性のアイコンの出現といった事項が指摘されています。社会的文脈をふまえ、雑誌の内容分析を行っており、視野の広い、高く評価できる論文でした。

坂本さんの論文は、秋葉原を起点とする「メイド喫茶」のブームが、その後、「コンセプトカフェ」の隆盛へと展開していった理由を考証するものです。明治期、「カフェー」の女給仕の制服が女性の商品化の徴表だったこと、現代日本では、「メイド喫茶」・「ガールズバー」などの形態に応じ、風俗営業法による営業制限があること、「コンセプトカフェ」の利用者へのインタビューを実施したことなど、論点は多岐にわたります。それら論点を整理し、「メイド喫茶」が場を楽しみ、「コンセプトカフェ」はキャストとのコミュニケーションを楽しむものであるという解釈へと収斂させていく行論は見事なものでした。

鈴木さんの論文は、若い女性による自画の加工という行為の動機を解明するため、ポートレートとは何かを写真論から説き起こし、加工経験者にインタビューを行い、考察を進めるものでした。ルッキズムの猖獗という社会的背景の指摘はすばらしい着眼です。さらに、加工には、自己肯定感の増進などを目的とする「矛の加工」とコンプレックスを掩蔽する「盾の加工」があるという甄別軸の提示は出色のものでした。この点について、矛と盾ということから、長尾先生・西田先生から、女性は何と戦っているのだろうかというお二人の解釈をお示しいただくなど、論文の議論を深める討議ができました。

鳴嶋さんの論文は 2010 年に発生した大阪二児置き去り死事件に対する世評への懐疑から始まるものです。母親を詰責する議論が多いなかで、杉山春氏のルポルタージュに倣い、痛ましい事件にいたった経緯が、家族形態の変化など、戦後日本の社会変動を背景に整理されてい

ます。また、子どもに対する虐待の対極だと考えられがちな「母子密着」についても、いくつかの絵本に描出される母子の紐帯の歪んだ礼讃が虐待の素地となっているという議論が展開されています。そして最後に、虐待をなくしていく方途として、社会教育の理念と実践を通じ、母子と社会が出会い、「物語」を共有していくことが提案されています。

志田さんの作品は ASD という障がいをもった主人公の他者とのかかわりを描いた小説です。5 万 5,000 字の大作で、残念ながら、発表会までに完読できかったのですが、会では、主人公・レオに対して、友人である須川が同性愛者であることをカミングアウトする場面、そして、同性愛者であることを親に知られ、気が動転した須川がレオに相談する場面が志田さんによって朗読されました。主人公が、須川との間合いをつかみかね、微妙な距離をおきながら、相手を尊重するあまり、さらに踏み込んでことばを紡ぐべきか逡巡しつつ、か細い筆致の線画のような会話が続く描写は、志田さんの感性を何よりも物語っていました。

奥村さんの作品は沖縄と性暴力をテーマとした 12 分 29 秒の映像作品です。沖縄を訪れ、米軍基地や反対運動を取材し、性暴力根絶を訴える人々にインタビューするなど、過重とも思しきテーマに真剣に向き合ったものでした。奥村さんの思考の碁迹は、かの地を象徴する高彩度の風景のなかで、凜としたナラティブを通じて表明されています。また、帰京後にキャンパスで行ったフラワーデモの映像やその取り組みを奥村さんが説明するシーンもあり、沖縄と性暴力の関係を知ってもらいたいという願い、性暴力の被害者には、寄り添う人々がいて、決して一人ではないと知ってほしいという思いが十二分に伝わるものでした。



▲六名の発表者の方々

今年度は、発表者が多く、とても充実した会となりました。

奥村さんは、昨年度の発表会に参加し、芸術学科生の卒業制作「言えなかった」を見て、創作意欲を大きく喚起されたとのことです。このような学年を超えたつながりはジェンダーフォーラムとしてとてもうれしいかぎりです。

また、すでにご存知のように、昨年 12 月、ジェンダーフォーラム担当者を務めてくださっていた人間科学科の打越正行先生がご病気で急逝されました。今回の発表会にかかわって、鳴嶋さんが先生から副査としてご指導を受けていたこと、奥村さんの沖縄への撮影行にも、先生のご指導があったことを聞き及びました。奥村さんの作品では、先生の生前のお姿を見ることができました。

先生が、学部・学科を問わず、数多くの学生とともに研究・学習に取り組まれていたことにいまさらながら想到し、本当に残念でなりません。ご冥福をお祈りいたします。

(杉本昌昭・ジェンダーフォーラム代表／経営学科)

BOOK REVIEW

本多勝一 著

『事実とは何か』未来社、1971年



『事実とは何か』というシンプルな問いが立てられた書名に惹かれ、本多勝一さんの雑文集である本書を手にとった。なかでも、『事実と「真実」と本質』という文章は、私が常々考えていたテーマだ。著者は、昭和後期～平成時代のジャーナリストである。新聞記者・編集委員を経て、「事実をつみあげて告発する」ルポを複数執筆したことで知られる。昨今の SNS や動画サイト等の普及は、世論を大きく動かし、ときには選挙結果さえ左右させる熱狂を生んだ。この熱狂の中には、「事実をつみあげて」という姿勢が欠けていると感ずる。対話や連帯が排除され、弱

者に対する強者の冷笑と、価値観の違いからの不寛容と分断が顕著なのが現代だ。インターネットの世界においては特に、何か意見を表明する際、マジョリティ・マイノリティに関わらず、感情的な文章が目立つ。特に SNS は、そのような投稿が目立つような仕組みになっていると思われる。

以下は、本書からの引用である。(p.17 より)

「真実」とは、事実または真理を、より情緒的に訴えるときに有効な単語なのです。情緒ということ自体は、悪いことだとは思いません。問題は、論理的な世界、論理的な文章の中で「真実」という情緒的な言葉を使うところにある。

これはけだし至言である。論理的な文脈では「事実」がふさわしく、情緒的な文脈では「真実」がふさわしい。これらの語を混同しないことだ。事象に対し、好悪などの感情や同情や共感ほ、いったん傍に置き「そこに人権侵害があるか」を軸に考えることが肝要である。私は、好きな人だから連帯・応援する、嫌いだから攻撃するのは違うと思っている。人権侵害を受けている人がいれば、その人のことが嫌いだろうが、粛々と支援や連帯をする。もし好きな人が人権侵害をしていたら、それを見抜き、苦言を呈するのが、本来の愛情や友情ではないだろうか。感情・情緒はとても人間らしい尊いものではあるが、これらは、ときに事実を見る目を曇らせ、心がかき乱されて苦しむ原因にもなる。本多さんの「事実をつみあげる」あり方は、今だからこそ光を当てる価値のある視点である。

(西川春菜・ジェンダーフォーラムスタッフ)

SONG REVIEW

ユニコーン

『ヒゲとボイン』 作詞・作曲：奥田民生
Sony Records、1991年



私は思春期に、ユニコーンという、きわめて個性的なバンドに夢中になった。特に、メンバーの奥田民生さん

の生き様に憧れ、私淑している。民生さんは、人と違っていてもいい、二番手でもいい、「自分の良さ・個性・強み」を発揮できればいい、ということを、音楽によって示してくれた。これは私の人生の指針となった。特に救われた点は、人生がうまくいかず低迷している時期に生きる勇気を与えてくれたことだ。

そんな彼が作った『ヒゲとボイン』という曲がある。以下の三人が登場人物だ。

僕＝主人公。うだつの上がないサラリーマン。

ヒゲ＝若いくせしてヒゲを生やして威張り散らしている、僕の雇い主の社長。

ボイン＝僕の同僚の女の子。ボインとはとっくに死語であるが女性の乳房が大きいこと、またはそのような女性を指す。僕はボインとキスをして以来、恋愛対象として気になっている。

＜サビ（一番盛り上がるところ）の歌詞より引用＞

ああ男にはつらくて長い二つの道が

ああ永遠の深いテーマさ ヒゲとボインが手招きする

「気になる女の子（ボイン）を社長（ヒゲ）に取られちゃう！ああ、どうしよう。僕は社長のように出世もできないし、彼女にはフラレそうだし…トホホ…」という、僕の叫びが聞こえてきそうなサビである。いや、逆かもしれない。「男にはつらくて長い二つの道がある。それは出世（ヒゲ）と女（ボイン）を獲得する道だ！それを僕は手に入れてみせるぞ!」と高らかに宣言しているのかも。

どちらにせよ、ヒゲは男らしさや家父長制の、ボインは「獲得する対象としての」女性の象徴であることは間違いないだろう。

私は『ヒゲとボイン』を初めて聴いたとき、ちょっとした違和感を覚えた。

歌詞の「ああ男には」という箇所にも、である。「男には、ということは、女には、ないのか…二つの道は。民生さんはそう思っているのかな」と少しがっかりした。心の中で、あるいは小さな声で「いや、女にも道はあるでしょう!」というツッコミを入れた。大声で「ちょっと、ちょっと!」と言えなかったのは、私も少なからずジェンダー規範の中にいたのか。

全員がリードボーカルを取り、作詞・作曲をし、面白いプロモーションビデオを撮り、ライブも個性的…そういう実験的な試みを繰り返すユニコーンの、王道でないところが私はとても好きだ。「普通」に反旗を翻してのパフォーマンスではないか。そんなバンドなら男らしさとか女らしさ

とか言わない筈だと思っていた。だから、「男には」と言い切られたのには軽い驚きとショックを隠せなかった。

最近、ジェンダーについて意識する機会が増えた。しかし、考えるにつけ、自分のアイデンティティを形成してきた部分がごっそりと削られる感覚があり苦しかった。まるで今までの自分が無くなってしまうような感覚を覚え、悲しかった。トレンドドラマと呼ばれる恋愛ドラマを観て見本にし、クリスマスイブは恋人と過ごす、バレンタインデーという行事、洋楽・洋画への憧れ…これらで醸成されたアイデンティティは間違いなく私の一部であり、「くだらないもの」として打ち捨てていくことはできない。美しく楽しい、大事な思い出は宝物として心の中にしまっている。ただそれだけが私ではなく、民生さんの「男には」に「おい、おい!」とツッコミを入れた私も、間違いなく私なのである。大事にしている今までの私と、ジェンダーを知った新しい私とが、うまく混ざりあい、変化していくことが私の「二つの道」だ。いつの間にか私も『ヒゲとボイン』を書いた頃の民生さんの歳を超えた。師と仰いでいる人を、ある面では超えることが人の成長だ。それでも私にとって彼が師であることに変わりはない。今年還暦を迎える民生さんを指針にしてこれからも私は生きていく。

（西川春菜・ジェンダーフォーラムスタッフ）

INFORMATION

2024年度から2025年度へ

ジェンダーフリースペースは、基本的に前期・後期の授業期間中（火・水・木曜日）の11:30～16:30（13:00～14:00はお休み）に開室しています。今年度は、主に昼休みや空きコマの時間に学生さんが来室され、外部の方々（卒業生や、地域の方々など）で賑わう日もありました。活気づき、充実してきた様子を見て日々嬉しさを感じています。来室すると、意見交換などの交流、ゆっくり勉強、スタッフから提供された資料を読む、昼食を食べる、のんびりするなどして、各々が思い思いに過ごしています。皆さんに開かれた居心地の良い居場所を目指しています。ぜひご来室下さい。

（西川春菜・ジェンダーフォーラムスタッフ）



▲様々な資料